

園舎の改善を通しての保育実践の変容(Ⅰ)

—研究者と保育者によるアクションリサーチの試み—

○福田秀子(山脇学園短期大学) 無藤隆(お茶の水女子大学) 向山陽子(駒場幼稚園)

I 問題

幼稚園は子どもの生活の場であり、子どもの心身発達の場でもある。無藤¹⁾は、幼稚園における子どもの動線と環境について考察した。子どもの動きの基本は循環であり、園内を回遊しながら仲間たちの様々な活動を見て、自分のしたいことを見つけると止まって参加し、それに飽きればまた回遊を始める。このような回遊とゆれが生じやすい環境の重要性を指摘している。

福田・無藤・向山²⁾は、「73年竣工の園舎で向山が保育実践をしながら園舎の改善を進めて来た幼稚園を対象に、園舎内の様々な場所とその場における子どもたちの活動の様子を観察し、保育環境と子どもの活動について検討した。その結果をふまえて園舎の改善を行い、改善後の子どもの活動を観察した。本研究では'95年秋から行われた改善と子どもの活動の変化をとらえ、幼稚園環境の検討を試みる。

II 方法

本研究は、観察者と保育実践者の協力により園舎の改善を進め、その後の子どもの活動の様子を観察・記録するアクションリサーチ法をとる。園長の保育実践記録と園舎の改修記録('95.9~'99.12)、および園長へのインタビュー、観察者による観察記録('98.4~'99.12)と保育者へのインタビュー等を資料とした。

観察対象：都内私立幼稚園児 102、保育者 22、(園長 1、常時保育者 10、その他の保育者 11)、事務専任 1('98.4 現在)、による保育の様子と保育の場としての園舎内の様子。

観察方法：保育中の園舎内を 1 周約 90 分でまわり、子どもたちがどのような場所でどのような活動をしているかを観察・記録し、補助として写真撮影する。また、保育終了後、保育者たちから状況説明やエピソード等の情報を得る。

表 園児数の変化

	'95	'96	'97	'98	'99
年少	9	21	36	31	37
年中	11	11	31	40	43
年長	8	11	13	31	38
計	28	43	80	102	118

*'95年度は9月1日、その他は5月1日現在

III 結果と考察

1. 園舎について

園舎は鉄筋コンクリート 2 階建て、屋上と地下を持つ立体構造である。中央に廊下と 1, 2 階をつなぐスロープがあり、その部分は吹き抜けになっている。「73 年園舎竣工当時は排気ガスによる大気汚染が深刻で、敷地が交通量の多い道路に沿っているため、園舎内だけで幼児保育ができるように設計された。'95 年秋、現園長の着任当時の園舎内は窓が少なくて暗く、各室が壁で仕切られた閉鎖的な空間であった。着任前には保育者主導の保育が行われ、固い石の床や打ち放しのコンクリート柱の角が危険なため、園舎内の移動はすべて保育者の引率で静かにゆっくりと行われていた。

園長交代に伴い、保育方針が子どもの自主性を重んじた自由感のある保育へと転換された。園舎内外の改善のコンセプトは、園内を閉鎖空間から開放空間にかかる、安全性確保のため保育者と子どもの動きやすい場にする、保育方針に沿った欲しい環境を作る、などである。

2. 主な改善と子どもたちの活動の変化

安全対策：打ち放しのコンクリートの柱や手すりの角が危険であったため、板をはりつけたり、端を丸く削って目立つ色を塗った。階段の上下には柵やドアを取りつけた。その結果、子どもたちが安全でスムーズに動けるようになった。

窓の新設：2 階の 4 つの保育室には窓を、1 階保育室には高窓を新設し、窓枠に明るい色を塗って採光と通風をはかった。(図中 A, B, C, D, E)

遊びスペースの新設：1 階への雨漏り防水工事を兼ねて、使われていなかった 2 階テラスの花壇を解体し、床をゴム張りにした(F)。その結果、両側の保育室から直接テラスに出て遊ぶ半外的なスペースができ、2 階保育室の園児数増加対策にもなった。その後、廊下とテラスの境のはめ込みガラスを引き戸サッシに替え(G)、透明の屋根をつけた(H)。その結果、雨天でも使用でき、廊下(I)も遊び空間として生かされるようになった。

2 階廊下突き当たり部分は暗く使いにくかったので、

照明を増やし戸棚を取り払って子ども用家具を置き遊びスペースを作った(J)。

保育室をつなげる：1階の閉鎖的な2つの保育室の境の壁を抜いてガラス引き戸をつけた(K)。その後、子どもたちが自由に往来して遊ぶようになった。

ミニ階段の新設：スロープ折り返し点の右側に小さい吊階段（ミニ階段と略）を新設した(L)。それまでは、1、2階の往来ルートがスロープのみであったが、2階への近道を作ったことで時間的・労力的な負担が軽減され、安全対策にもなった。ここは、単に通路としてだけでなく、様々な遊びの場にもなった。また、ミニ階段ができるで子どもたちの園内回遊あそびが盛んに行われるようになった。小さな階段の新設によって、園舎内に無藤¹⁾や仙田³⁾が指摘した循環性が生じた。

外階段と入口テラスの新設：2階保育室と園庭を直接つなぐ外階段を新設し(M)、2階の小テラスを拡大して(N, O)つづけた。外階段の新設により園児が二手に分かれることになり、ゆとりが生じ、より安全性が増した。2階テラスはかなり広いので、すぐに子どもたちの遊び場になった。また、屋内の延長として気軽に出てきて又戻ったり、外と内を結ぶ中間的な場としての役割を果たす場所になっている。

外階段ができるからは、2階テラスから庭の様子を見て面白そうだと感じるとすぐに靴を替えて庭へ出られるようになった。以前は内と外をつなぐ場所は玄関だけであったが視覚的・空間的に分断されていた2階と園庭がつながったことにより、年中・年長児の外遊びが一層多くなった。

外階段の新設により、スロープの通行量は大幅に減少したが、逆に年少児の姿は多くなった。また、スロープの長い斜面を生かした遊びが以前より増えた(P)。通行による遊びの中斷が減って面白い遊びの場としての特徴が生かされてきた。

ミニ階段の設置によって通路部分に回遊性が生じ、子供たちの回遊遊びが始まったが、外階段が新設されると、まもなく回遊ルートの中に上下のテラスと外階段も組み込まれた。回遊ルートはより長く、コースの選択肢も増え、年中・年長児はさらにダイナミックに園舎の内外を動き回るようになった。

IV まとめ

種々の改修と保育の工夫により、園舎は保育方針に合った、より安全でより動きやすい場にかえられてきた。その中で子どもたちは安全につながる身体の使い方の指導を受け、1人1人が自主的に活動し場所に慣れることによって、各場所の特徴をつかみ、建物を上手

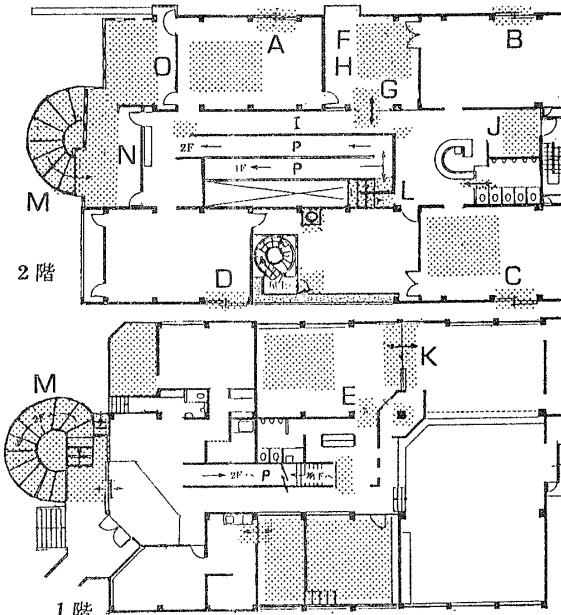


図 園舎内配置図と主な改善箇所

に使いこなして活発にあそびを展開している。

無藤⁴⁾は、レルフ⁵⁾に拠り、幼児の発達環境としての場所の意味を考察した。幼い子どもは、特定の場所や対象で身体を使った行動体験を日々積み重ねるうちに各対象や場所にふさわしい動き方を習得する。場所になじみ、愛着し、根付くという感覚を持つことによって心身の安定が得られ、その安定した場所を足掛かりにしてさらに活動の場を広げてゆく。このような過程の中で心身の発達が生じると考え、活動の場所と発達の密接な関係を指摘した。この観点に立てば、園舎内外のあらゆる場所と、そこで展開される保育の様子を観察・検討し、その結果を次の改善に生かすことの意義は大きく、アクションリサーチが子どもの発達を促す幼稚園環境作りをすすめる上で一つの有効な手段になると思われる。

引用文献：

- 1)無藤 隆, トポスにおける発達(2), 幼児の教育, 94-6, 29-36, フレーベル館, 1995
- 2)福田秀子・無藤隆・向山陽子, 幼稚園環境の検討－特定の場所と子どもの活動観察を通して, お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要, 1号, 57-69, 1999
- 3)仙田満, 子どもとあそびー環境建築家の眼, 岩波新書 1992
- 4)無藤 隆, トポスにおける発達(1), 幼児の教育, 94-4, 24-31, フレーベル館, 1995
- 5)レルフ, 高野岳彦訳, 場所の現象学, ちくま学芸文庫, 1999